中院通村年譜―書跡に関する交流を中心として―

田中春菜

はじめに

中院通村（一五八八―一六五三）は、中院通勝（一五五六―一六一〇）の第一子として生まれる。母は、細川幽斎（一五三四―一六一〇）の養女である。極官は正二位、内大臣で、後水尾院（一五九六―一六八〇）の第一の側近であった。元和九年（一六二三）に武家伝奏に任じられたが、寛永六年（一六二九）の後水尾院の突然の譲位に際して、寛永七年（一六三〇）にそれを免じられる。寛永十二年（一六三五）三月に子の中院通純（一六一二―一六五三）とともに江戸へ召還され、十二月まで幽閉された。

歌の家に生まれた通村は、幽斎から古今伝授を受けた父の通勝に歌学を学ぶ。中院家は通勝の頃より、源氏学の権威であった三条西家からも学びを受けており、通村の頃になると三条西家を凌ぐ家となる。通村は、三条西実条（さねえだ）（一五七五―一六四〇）、烏丸光広（一五七九―一六三八）とともに後水尾歌壇の中心的な指導者となったこと、源氏学の第一人者となったことなどから、高い文化力と影響力を持ち得ていた。その功績として、元和元年（一六一五）七月の徳川家康（一五四二―一六一六）への源氏物語講釈などが挙げられる。

書道史研究上では、通村は、江戸時代初頭、寛永の三筆とほぼ同時期に活躍した能書であり、古筆鑑定に優れた人物として知られている。主な先行研究には、小松茂美氏による『日本書流全史』上下（講談社、一九七〇年）、『古筆』（講談社、一九七二年）、『日本書蹟大鑑』第一六巻（講談社、一九七八年）、『古筆学大成』全三〇巻（講談社、一九八九年―一九九三年）などがある。これらには、通村の書をはじめ、伝藤原行成筆「関戸本古今集」（個人所蔵）のように通村の奥書や添状を有する書跡が取り上げられているほか、江戸時代初頭の古筆の流行の実相を伝える史料として『中院通村日記』が度々用いられている。小松氏『日本書流全史』上下では、「本朝古今名公古筆諸流」「筆跡流儀系図」「流儀集」「古筆流儀別」に世尊寺流、さらにこれらに加えて「古筆流儀分」では中院流（当主）に名が見える。こうした先行研究を整理していくと、通村の書にまつわる活動は、鑑定、短冊や懐紙の揮毫、禁裏での書写活動、伝藤原公任筆「十五番歌合」（前田育徳会所蔵）に見るような補写や模写本の制作、「源氏物語手鑑」（和泉市久保惣記念美術館所蔵）のような斡旋や詞書の書写といった多種多様な活動を展開していたことが確認される。これらは、後水尾院と近しく、歌壇の主格を担った通村の活動環境にふさわしいものといえよう。

なお、通村の文事に関する年譜には、日下幸男氏「中院通村年譜稿：少青年期」（『國文學論叢』三一、龍谷大學國文學會、一九八六年）、「中院通村年譜稿：中年期（上）」（『國文學論叢』四八、龍谷大學國文學會、二〇〇三年）、「中院通村年譜稿：元和二年」（『龍谷大學論集』四六二、龍谷学会、二〇〇三年）、「中院通村年譜稿：中年期元和三年～八年」（『龍谷大學論集』四七一、龍谷学会、二〇〇八年）がある。また、歌人としての通村について述べられている先行研究には、鈴木健一氏「後水尾歌壇の成立と展開」（『國語と國文學』六三、東京大学国語国文学会、一九八六年）、高梨素子氏『後水尾院初期歌壇の歌人の研究』（おうふう、二〇一〇年）、日下氏『後水尾院の研究』（勉誠出版、二〇一七年）などがあり、後水尾歌壇の文化活動を語ろうとする中で主要な人物として位置づけられている。

書道史研究では、通村に着目した研究は少なく、通村の書に関する功績を鑑るとと研究の余地がある。それを踏まえて本稿では、通村の書跡をめぐる交流の一端を明らかにし、書道史研究に資することを目的とした年譜の作成を試みた。主に、『中院

通村日記』の謄本三冊（東京大学史料編纂所所蔵）に加え、通村と関わりがあった人々の日記である西洞院時慶『時慶記』、舟橋秀賢『慶長日件録』、山科言緒『言緒卿記』、土御門泰重『泰重卿記』、鳳林承章『隔蓂記』、日野資勝『資勝卿記』を用いて内容を補い、書跡にまつわる交流を確認できる記載を取り上げて、整理を行ったものである。

本稿では、『中院通村日記』などに見える通村の書跡に関連した交流の全容を概観することに努めた。書跡を介した人々との結びつきの中で、通村がどのような役割を果たしたのか、何を求められたのかを明らかにするための史料とすることに焦点をあてたものである。通村の書に関わる活動の全てを記したものではないが、後水尾院、前田利常（一五九四―一六五八）、冷泉為満（一五五九―一六一九）ら有力な文化人をはじめとする公家、武家、町人、僧侶といった様々な階級の人々と交流を持っていたこと、その中で大きな信頼や支持を得ていたことが確認できる。通村の活動を通して、江戸時代初頭の書の需給の様相や、書道史研究上でこれまで注目されてこなかった人物、書を取り巻く状況変容等の一端が明らかになるものと思われる。また、この時代は、サロンが形成され、それを媒介として幅広い文化交流が行われていた。通村の書の活動は、特に後水尾歌壇の動向と密接に関わっている。通村を定点として、後水尾院とその周辺で行われた書にまつわる活動を包括的に捉えることも可能であろう。なお、この年譜をもとに通村と書に関する研究を別に発表する予定である。

凡例

・年譜は、日記の本文、主要事項、主要人物の順に記した。主要事項には日記に見える主な事柄を記載し、本文の引用には「　」を使用した。※には、関連史料や主要文献、特記事項などを記した。主要人物には日記に見える人物の略歴を記した。

・新字・旧字・俗字・別字などについては、基本的に記事本文中では文献に従ったが、混同を避けるために統一したものもある。

・『中院通村日記』の謄本（東京大学史料編纂所所蔵）は、焼失を免れた日記の草稿を寛保元年（一七四一）に書写したもので、上、中、下の三冊からなる。日記は、慶長二十年（一六一五）から寛永十四年（一六三七）までの二十三年間にわたるが、月日が部分的に欠落している。上には「明治十七年五月二十三日華族中院通富蔵書ヲ寫ス」二級寫字生水上昌言」四等掌記瀧澤規道校」京都帝国大学保管中院通村日記ニ依り校訂朱字」ヲ加フ」、中には「三級寫字生山中政篤寫」四等掌記瀧澤規道校」、下には「明治十七年五月二十六日華族中院通富蔵書ヲ寫ス」三級寫字生山中政篤寫」四等掌記瀧澤規道校」と奥書がある。

慶長二十年から元和九年十一月までは、東京大学史料編纂所編『大日本史料』第一二編之一―四六（東京大学出版会、一九六八年―一九七七年）、第一二編之四七―六二（東京大学史料編纂所、一九七七年―二〇二〇年）に部分的に翻刻されている。

『中院通村日記』は、東京大学史料編纂所所蔵の謄本三冊を用いたが、京都大学付属図書館所蔵以外は、中院千華様より承諾を得て翻刻を行ったものである。よって、承諾が必要な個所の転載は禁ずる。

翻刻に関して、『大日本史料』第一二編に翻刻がされている部分はそれに順じた。翻刻がされていない部分は、筆者による。年譜には、〈句読点、筆者〉と記した。

・『時慶記』は、西洞院時慶の天正十五年（一五八七）から寛永十六年（一六三九）までの日記である。翻刻本は、時慶記研究会編『時慶記』第一―六巻（臨川書房、二〇〇一年―二〇一九年）の元和四年（一六一八）までを用いた。

・『慶長日件録』は、船橋秀賢の慶長五年（一六〇〇）から同十八年（一六一三）までの日記である。翻刻本は、山本武夫校訂『史料纂集古記録編　第六〇回配本　慶長日件録』一（続群書類従完成会、一九八一年）、『史料纂集古記録編　第一〇七回配本　慶長日件録』二（続群書類従完成会、一九九六年）を用いた。

・『言緒卿記』は、山科言緒の慶長六年（一六〇一）から元和五年（一六一九）までの日記である。翻刻本は、東京大学史料編纂所編纂『大日本古記録　言緒卿記』上（岩波書店、一九九五年）、『大日本古記録　言緒卿記』下（岩波書店、一九九八年）を用いた。

・『泰重卿記』は、西洞院泰重の慶長二十年から正保五年（一六四八）までの日記である。翻刻本は、武部敏夫・川田貞夫・本田慧子校訂『史料纂集古記録編　第九五回配本　泰重卿記』一（続群書類従完成会、一九九三年）、『史料纂集古記録編　第一一三回配本　泰重卿記』二（続群書類従完成会、一九九八年）、『史料纂集古記録編　第一三八回配本　泰重卿記』三（続群書類従完成会、二〇〇四年）の寛永七年までを用いた。

・『資勝卿記』は、日野資勝の元和二年（一六一六）から寛永十六年までの日記である。翻刻は、『大日本史料』第一二編に順じた。

・『隔蓂記』は鳳林承章の寛永十二年から寛文八年（一六六八）までの日記である。翻刻本は、赤松俊秀校訂『隔蓂記』全七巻（思文閣出版、二〇〇六年）を用いた。

・本稿は、第九回公募公益財団法人日本習字教育財団学術助成の一部である。

・句読点は、翻刻本に順じているが、『中院通村日記』の筆者による翻刻部分は、『大日本史料』第一二編を参考にした。

・後水尾院は、天皇としての在位は慶長十六年（一六一一）から寛永六年までである。以後は四代の天皇の後見人として院政を行った。本稿では、天皇としての在位期間も後水尾院と呼称して統一する。

年譜

≪慶長九年（一六〇四）十一月二十三日≫

及晩平野五郎左衛門・敦忠薗部衛門晩食ニ召之、為相伴君・梅龍軒御出、入夜竹内（孝治）へ行、今夜月待也、中院（通村）待従古筆朗詠一巻被随身、筆跡驚目者歟、月出之後帰蓮華、（『慶長日件録』）

【主要事項】舟橋秀賢は、竹内孝治のもとで、通村が持参してきた「古筆朗詠一巻」の筆跡を見て驚く。

【主要人物】舟橋秀賢（一五七五―一六一四）…従四位・式部少輔となる。家業は、明経道。書流は、中院流。（小松茂美『日本書流全史』上下、講談社、一九七〇年。小松『日本書蹟大鑑』第一三巻、講談社、一九七九年）竹内孝治（一五八六―一六六〇）…従二位・刑部卿となる。（野鳥寿三郎編『公卿人名大事典　普及版』日外アソシエーツ、二〇一五年）

≪慶長十年（一六〇五）正月二十二日≫

中院待従假名名筆五對被恵之、良筆也、（『慶長日件録』）

【主要事項】舟橋秀賢は、通村から「假名名筆五對」を頂戴した。良筆のものであった。

【主要人物】舟橋秀賢…前掲。

≪慶長十年（一六〇五）二月十八日≫

中院従待より手本一巻見ニ来、多分可為行成卿筆之由申遣畢、（『慶長日件録』）

【主要事項】舟橋秀賢は、通村に「手本一巻」がおそらく行成筆であることを答える。

【主要人物】舟橋秀賢…前掲。

≪慶長十年（一六〇五）五月十六日≫

中院待従より行成卿真筆之朗詠借寄令臨写、（『慶長日件録』）

【主要事項】舟橋秀賢は、通村から「行成卿真筆之朗詠」を借用し、臨写させる。

※『慶長日件録』慶長十年五月二十一日条から、これが下巻であったことがわかる。

【主要人物】舟橋秀賢…前掲。

≪慶長十年（一六〇五）五月二十一日≫

中院待従〈朗詠下一巻返進之、（『慶長日件録』）

【主要事項】舟橋秀賢は、通村に「朗詠下一巻」を返戻する。

【主要人物】舟橋秀賢…前掲。

≪慶長十年（一六〇五）七月八日≫

中院待従（通村）来入、朗詠古筆被見之、誰人筆共不知之、入夜中院待従又来談、行成卿筆之一軸隨身、令一覧之處多分正筆也、（『慶長日件録』）

【主要事項】通村が舟橋秀賢のところに訪ねて来て、筆者不詳の「朗詠古筆」を見る。また通村は、夜に「行成卿筆之一軸」を持参してきた。おそらく正筆である。

【主要人物】舟橋秀賢…前掲。

≪慶長十年（一六〇五）十一月二十日≫

中院待従（通村）入来、定家卿筆跡之懸物被見之、（『慶長日件録』）

【主要事項】舟橋秀賢は、通村が持参してきた「定家卿筆跡之懸物」を見る。

【主要人物】舟橋秀賢…前掲。

≪慶長十一年（一六〇六）十一月十四日≫

中院〈行、万葉十三ノ巻令助筆間遣之、中院拾遺（通村）従年少耽載籍常翫翰墨、憑感御深志、馳禿筆、助其勤労者也、如此令奥書畢、（『慶長日件録』）

【主要事項】舟橋秀賢は、通村を訪れ「万葉十三ノ巻」の書写を助ける。秀賢は、奥書に「中院拾遺（通村）従年少耽載籍常翫翰墨、憑感御深志、馳禿筆、其勤労者也」と記した。

※「曼殊院本　万葉集」十三巻（京都大学付属図書館所蔵）の奥書に「中院拾遺従年少耽載籍常翫翰墨、憑感御深志、馳禿筆、助其勤労者也、慶長丙午中冬中旬、野儒秀賢、卅二丁」とあることから、これが該当することが確認できる。

【主要人物】舟橋秀賢…前掲。

≪慶長十二年（一六〇七）六月十六日≫

中院拾遺許〈行、弘法大師彌陀之名号拝見之、驚目者也、（『慶長日件録』）

【主要事項】舟橋秀賢は、通村の邸宅で「弘法大師彌陀之名号」を見て驚く。

【主要人物】舟橋秀賢…前掲。

≪慶長十二年（一六〇七）六月十七日≫

良庵・為作・藤木駿河等令同心中院亭〈行、五筆之名号令拝見畢、（『慶長日件録』）

【主要事項】舟橋秀賢は、通村の邸宅で「五筆之名号」を見る。

【主要人物】良庵（生没年未詳）…詳しくは知られていないが、小堀宗慶『小堀遠州の書状』（東京堂出版、二〇〇二年）によると小堀遠州らとも交流のあった医師とされる。

藤木成定（一五五七―一六三五）…細川幽斎に仕える。鍼述の駿河流の祖。書は、大師流を能くした。（小松、前掲『日本書流全史』上下）

≪慶長十七年（一六一二）七月三十日≫

一　先度従中院少将来ル石川主殿源氏ノ色帋書候而遣了祝

一　花散里

ほとゝきすなきてわたるもよほしきこえかほなれは御車をしかへさせてれいの」

これみついれたまふをちかへりえそしのはれぬほとゝきすほのかたらひしやとのかきねに」

一　わかな」
うちかしこまりて給はり給ほとよういほくめやすくていちこつてうの聲に」
はちのをゝたてゝふともしらへやらてさふらひ給」
一　はしひめ」
さゝやかにをしまきあわせたるほくとものかひくさきをふくろにぬひいれたるとり」
いてゝたてまつる」（『言緒卿記』）

【主要事項】山科言緒は、石川忠総依頼の「源氏ノ色帋」の詞の書写ができたため、通村に渡した。

※この条に見える詞書が、「源氏物語手鑑」（和泉市久保惣記念美術館所蔵）と合致することから、手鑑の依頼者と斡旋者が明らかにされた。（山根有三「土佐光吉とその関屋・御幸・浮舟図屏風」『国華』七四九、七五〇号、国華社、一九五四年。『源氏物語手鑑研究』（和泉市久保惣記念美術館、一九九二年）

【主要人物】山科言緒（ときお）（一五七七―一六二〇）…従三位・参議となる。書流は、三条流。（小松、前掲『日本書流全史』上下。野鳥、前掲『公卿人名大事典　普及版』）
石川忠総（一五八二―一六五一）…美濃大垣三代藩主、豊後日田藩主、下総佐倉藩主、近江膳所藩主を歴任した。徳川秀忠の近習、徳川家光の娘の千代姫の墓目役を務める。（工藤寛正編『江戸時代　全大名家事典』東京堂出版、二〇〇八年）

≪慶長十八年（一六一三）八月十五日≫

一中院（通村）へ石清水法楽ノ短冊清書〻遣候、（『時慶卿記』）

【主要事項】西洞院時慶は、通村のところへ清書した「石清水法楽ノ短冊」を遣わした。

※『時慶卿記』慶長十八年八月十四日条には、「頓而中院法楽ノ草ヲハ被染尊筆被持下候」とある。

【主要人物】西洞院時慶（一五五二―一六四〇）…従二位・参議となる。書流は、尊鎮流、中院流。（小松、前掲『日本書流全史』上下。小松『日本書蹟大鑑』第一五巻、講談社、一九七八年）

≪慶長十九年（一六一四）二月七日≫

卯ノ法楽哥中院（脱か）へミセテ清書也、（『時慶卿記』）

【主要事項】西洞院時慶は、通村に「卯ノ法楽哥」を見せて清書をした。

【主要人物】西洞院時慶…前掲。

≪元和元年（一六一五）正月十九日≫

御會始也、（出題雅房卿、柳先花緑題五首被進之、為勅言被定之也、被書進候也、）予歌今日仙洞入見参、有仰詞詠草、申刻許参内、秉燭之後、依召参御前、御懐紙御清書被見下、麁相也、如何之由存之所、麁相ナル哉之由仰也、被遊改可然之由申之、則又御清書、尤重驚目、暫而事始、（『中院通村日記』）

【主要事項】通村は、御前に召され、後水尾院に「御懐紙」の清書を見せられた。通村は、「麁相」と評して改めることを申した。また、「御清書」は、最も珍しく驚く。

【主要人物】後水尾院（一五九六―一六八〇）…後陽成院の第三皇子。第一〇八代天皇となる。書流は中院流、三藐院流、後水尾院流。（小松、前掲『日本書流全史』上下。小松『日本書蹟大鑑』第一八巻、講談社、一九七九年）

≪元和元年（一六一五）正月二十一日≫

依當番参内、午刻有召参御前、宣衡卿、予、兼賢朝臣（兼勝卿代）、嗣良等、各當番也、有楽、御笛被遊之、予篳篥少々鳴之、（音律不調、只動手許也、）兼賢朝臣、嗣良等、又時々吹笛、又五常楽習之、（楽五常楽也、）

唐ノ押絵石摺ノ文字等有御前、雅胤朝臣見進云々、予手鑑入見参、又道風真跡、地絹文字四行色カキ、予進上之、絵ヲ重テ、彼文字ノ色紙ノ入程切ヌキテ入之、色紙ノ外金也、下ニ重タル紙猶有之、又表紙以羅懸之、又ソ眼假名連歌付句之切拝領之、又雅康卿二楽軒短冊一枚同拝領之、嗣良後柏原院御在位以前ノ也、御短冊賜之、宣衡卿、聖護院道増御短冊拝領、其外故筆二枚賜之、兼賢朝臣拝領、何物哉失念、入夜猶有御前、准后歟又御楽時々有之、御箏等被遊之、夜半過下格子各宿番衆所、(『中院通村日記』)

【主要事項】通村は後水尾院（御前）に召される。そこには、「唐ノ押絵石摺ノ文字等」があった。飛鳥井雅胤から進められたものだという。その中で通村は、「手鑑」を目にかける。また、通村は絹地に四行書きの「道風真跡」を後水尾院に進上した。「色紙（道風真跡）」は、絵を切り抜いたもので仕立ててあり、外側は金、表紙は羅（絡織のことか）である。そして、「ソ眼假名連歌付句之切」、「雅康卿短冊一枚」を拝領した。高倉嗣良は、御在位前の「後柏原院御短冊」を拝領した。中御門宣衡は、「道増御短冊」と「故筆二枚」を拝領した。広橋兼賢が拝領したのは何であったか忘れた。

※御前には、中国の拓本や手鑑があったようだ。「道風真跡地絹文字四行色カキ、」は伝称筆者から推測するに、「絹地切」の断簡などが考えられる。

【主要人物】飛鳥井雅胤（まさたね）（一五八六―一六五一）…従一位・権大納言となる。最初の名を難波完勝として、難波家を継ぐ。後、雅宣、雅胤に改名して飛鳥井家を継いだ。家業は和歌、蹴鞠。書流は飛鳥井流。（小松、前掲『日本書流全史』上下。小松『日本書蹟大鑑』第一六巻、一九七八年）

中御門宣衡（一五九〇―一六四一）…正二位・権大納言となる。家業は儒学、有職故実。（野鳥、前掲『公卿人名大事典　普及版』）高倉嗣良（一五九三―一六五三）…従三位となる。寛永十四年に高倉から藪へ改姓した。高倉家の家業は、衣紋道、有職故実。書流は定家流、三藐院流。（小松、前掲『日本書流全史』上下。野鳥、前掲『公卿人名大事典　普及版』）

広橋兼賢（かねかた）（一五九五―一六六九）…従一位・准大臣となる。家業は儒学、有職故実。書流は中院流。（小松、前掲『日本書流全史』上下。小松、前掲『日本書蹟大鑑』第一八巻）

後水尾院…前掲。

≪元和元年（一六一五）三月十二日≫

続撰吟抄八冊後土門院以後作者歌書集也、徳大寺嗣公卿、実通卿父子之手跡也、翌日到来也、(『中院通村日記』)

【主要事項】通村のもとに徳大寺公胤、実通親子の筆跡の「続撰吟抄八冊」が翌日到来する。

≪元和元年（一六一五）三月十五日≫

石川主殿頭源俊長上洛、依大坂之事也、仍、可見舞之由申之、予調状遣之、今日七条西邊陣（葛野郡七条村）替石主殿御所中ノ邊歟、云々、然共昨日禹亭入來之時、及晩可罷帰之由申候間、其節可然歟ノ由、予命与九郎、其間千年禁中御千首之後（ママ）懐紙、三六人歟短冊別写之、命書写之由、彼短冊懐紙等可返上タメ也、(『中院通村日記』)

【主要事項】通村は、石川忠総陣を七条付近へ移す。また、「千年禁中御千首後（ママ）懐紙」を書写する。短冊や懐紙等を返上するためである。

【主要人物】石川忠総…前掲。

≪元和元年（一六一五）三月十六日≫

雖為当番、右金吾可参之由也、請取番也、昨日又渡番也、今朝御千首懐紙短冊等返上、(『中院通村日記』)

【主要事項】通村は、「御千首懐紙短冊等」を返上した。

※通村は、前日の『中院通村日記』元和元年四月十五日条において、「千年禁中御千首後懐紙」を書写している。

≪元和二年（一六一六）正月十日≫

自松平筑前守利光有状、去年源氏絵誂右左少左衛門尉伎詞、可予書之由也、予云交数人之手者可然歟之由、此時使者、絵師也、返答云、然者可相計之由也、仍旧冬、絵出来之分、四巻誂他人遣之伎礼也、雖未對面祝着之間、贈状之由也、随分早迷出来頼之由之、（『中院通村日記』）〈句読点、筆者〉

（加賀宰相 加賀能登誠中三ケ金守之）

【主要事項】通村のもとに、前田利常から書状が届き、「源氏絵」の詞書の書写を依頼される。交わる数人の手がこれでふさわしいかどうかの相談の旨である。この時の使者は絵師である。通村は、絵が出来上がった四巻分を他の人に遣わして誂える旨の書状を送る。

※前田利常が通村に依頼した絵巻形式の源氏絵に関しては、『中院通村日記』元和二年正月十日条、十二日条、二月二十一日条、三月十一日条、二十七日条、四月十三日条、五月七日条に見える。

【主要人物】前田利常（一五九四―一六五八）…加賀藩二代藩主。加賀前田家三代。利光の後に、利常を名乗る。（小松『日本書蹟大鑑』第一七巻、講談社、一九七九年）

≪元和二年（一六一六）正月十一日≫

信行院来、扇二本、子昴千字文恵之、（日本新刻本也、真草）（但昨日也、）

【主要事項】通村は、やってきた信行院に扇二本と、日本新刻本の子昴（趙孟頫）の千字文を与えた。

【主要人物】信行院…京都の信行院の僧侶と思われる。

≪元和二年（一六一六）正月十二日≫

土佐勝左衛門来、彼源氏絵為下絵、初子（三所）、胡蝶（二ケ所）、螢（三ケ所）等令図之、彼絵問ニ合ヲ二枚続、其中ニ一巻ヲ三ケ所二ケ所充書之、詞同鳥子（マニアイ）一枚一段ニ欠行書之、出来分四巻、筆者桐壺、箒木、空蟬（三段半 巻也）、八条殿、夕顔（一段）、若紫（此一巻 二段）、竹門主、上ノ六段為一巻、末、紅、花飛黄門、（舊冬十二月十六日、任大納言、廿二日死去）葵（二段四ケ所）、榊（一巻也）雅胤朝臣、右合六段一巻、花、須、明日大（一巻也）、澪、蓬、關四辻宰相中将、絵、松、薄（一巻也）、槿、乙、玉随庵（前大覚寺宮空性法親王）、御落墮之後号之、（『中院通村日記』）

朝程庄大夫（蒔絵師）来、明日駿府下向云々、（為石川主殿頭見舞也、）古今箱、硯筥等令見、古今ハ為家卿筆、一本ハ以定家卿自筆不違一字書写也、貞應元年奥書歟、無真名序、一本（去年買得也、）有真名序、古本之写歟、箱銘予書之、（梨地銘金、定家卿写、今一本地同、銘銀、）硯箱立田山重疊、上ノ山ニ無葉楓木、端山立木紅葉ニ金ト粉ト鳥居アリ、下ニ川紅葉散之、結構之物也、裏難波海ノ躰、芦千鳥月鶴（有垣）、（金物高入之、）女硯也、今一箱黒漆橘樹花散花、裏同（梨地）、有橘實、蓋ノ裏屋ニ簾枕等在之、男硯也、（『中院通村日記』）

【主要事項】土佐勝左衛門が描いた「源氏絵」の下絵、桐壺から玉鬘までの四巻分に関して、通村が公家衆に斡旋して詞書が完成した。その筆者と分担は以下の通りである。

一巻　八条宮智仁親王（八条殿）　桐壺・箒木・空蟬
　　曼殊院良恕法親王（竹門主）　夕顔・若紫
一巻　飛鳥井雅庸　末摘花・紅葉賀・花宴
　　飛鳥井雅胤　葵・榊
一巻　日野資勝　花散里・須磨・明石
　　四辻季継　澪標・蓬生・関屋
一巻　空性法親王（随庵）　絵合・松風・薄雲・槿・乙女・玉鬘

通村は、明日、石川忠総の元へ見舞に行くという蒔絵師庄大夫から、「古今箱、硯筥等」を見せられた。「古今」は為家筆のもので、そのうちの一本は、定家自筆を一字も違わずに書写したものである。貞應元年の奥書か、真名序はない。もう一本は、去年買い得たもので、真名序がある。古本の写しだろうか。箱書きは通村が書写した。一つは、梨地に金の銘で、定家の筆跡を写した。もう一つは、梨地に銀の銘で

ある。硯箱は、幾重に重なる立田山の図があり、上の山に葉の無い楓木、端山に立ち木の紅葉に金と粉と鳥居が施されている。下の山には紅葉が川に散っていて結構な物である。裏は、難波海のようで、芦、千鳥、月、鶴が施されている。「女硯」である。もう一箱は、黒漆箱に、橘樹の花が散っている。裏は同じ梨地で、橘實が施されている。蓋の裏屋には、家屋に簾枕等が施されている。「男硯」である。

※「一本去年買得也」、「箱銘予書之」とあるのは、自らの所持する目的ではなく、誰かからの依頼によるものと思われる。

【主要人物】土佐勝左衛門（生没年未詳）…土佐派の絵師と思われるが、その詳細については不詳。『中院通村日記』に庄左衛門ともある。

飛鳥井雅庸（つね）（一五六九―一六一六）…従二位・権大納言となる。家業は、蹴鞠、書、和歌。書流は、飛鳥井流。（小松、前掲『日本書流全史』上下。野鳥、前掲『公卿人名大事典　普及版』）

空性法親王（一五七三―一六五〇）…随庵。誠仁親王の第二皇子。後陽成天皇の弟。大覚寺門跡。書流は三藐院流。（小松、前掲『日本書流全史』上下。小松、前掲『日本書蹟大鑑』第一六巻）

曼殊院良恕法親王（一五七四―一六四三）…竹門主。誠仁親王の第三皇子。後陽成院の弟。書流は、持明院流。（小松、前掲『日本書流全史』上下。小松、前掲『日本書蹟大鑑』第一六巻）

日野資勝（一五七七―一六三九）…正二位・権大納言となる。家業は、儒道、有職故実。書流は、定家流。（小松、前掲『日本書流全史』上下。小松、前掲『日本書蹟大鑑』第一五巻）

八条宮智仁（としひと）親王（一五七九―一六二九）…誠仁親王の第六皇子。後陽成天皇の弟。桂離宮を造営した。書流は、後柏原院流。（小松、前掲『日本書流全史』上下。小松『日本書蹟大鑑』第一四巻、講談社、一九七九年）

四辻季継（一五八一―一六三九）…正二位・権大納言となる。家業は、和琴、箏、神楽、有職故実。書流は三藐院流。（小松、前掲『日本書蹟大鑑』第一五巻）

飛鳥井雅胤…前掲。

≪元和二年（一六一六）正月三十日≫

其後了佐来、麁屋ト号歟、古筆刀等目利也、手鑑持来、所持内也、驚目了、招右金吾（永慶朝臣）可見之、亥剋許各帰、其後為神事沐浴潔齋、了佐色紙（スキ色）鳥子（紫淺キ各五枚、表裏打曇五枚）、恵之、（『中院通村日記』）

【主要事項】通村は、古筆了佐が持参した「手鑑」を見て非常に驚く。高倉永慶（右金吾）を招いてこれを見せた。また、古筆了佐に「色紙（スキ色）鳥子（紫淺キ各五枚、表裏打曇五枚、）」を与えた。

【主要人物】古筆了佐（一五七二―一六六二）…古筆鑑定家。古筆家初代当主。（小松、前掲『日本書蹟大鑑』第一七巻）

高倉永慶（一六九一―一六六四）…右金吾。正二位・権大納言となる。家業は、装束、有職故実。書流は中院流。（小松、前掲『日本書流全史』上下。小松、前掲『日本書蹟大鑑』第一七巻）

≪元和二年（一六一六）二月二十一日≫

土佐勝左衛門来、此中所勞故不見舞云々、又源氏下絵催促也、松平筑前守（加賀宰相利光歟）誂也、今日常夏、三ケ所、篝火、二ケ所、野分、三ケ所、令付下絵、（『中院通村日記』）

【主要事項】通村は、土佐勝左衛門に前田利常から依頼されている「源氏下絵」を催促して描かせる。今日、常夏三ヶ所、篝火二ヶ所、野分三ヶ所を描かせた。

【主要人物】土佐勝左衛門…前掲。

前田利常…前掲。

≪元和二年（一六一六）二月二十七日≫

有少用向秀雄亭云々、彼亭ノ向町有語（梧）心院出京、仍向彼所歟、前大樹玉葉（駿府御マンノ本也、十七巻、八丁書之、夜新千載集四五丁書之、（『中院通村日記』）

【主要事項】通村は、「玉葉（十七巻、八丁」、「新千載集（駿府御マンノ本也、四五丁」を書写する。

≪元和二年（一六一六）三月四日≫

自駿府石川主殿頭有飛脚、状云、大御所逐日被著験、予下向遅々也、早々可下之由也、又去年所借置薬一冊可返之、又伊勢国有定家卿真筆古今集之由、良庵申之（先年以佛眼院豪春入見参、仙洞真筆之由仰也云々、）之間取寄、仙洞御所へ懸御目、於正筆者可買得云々、（仙洞江申入之處、御失念云々、）淺澤又三郎同進状、是又令早々下向可然之由也、又良庵所へ状到来、仍持遣了、返答云、明日邊令伊勢下向、彼古今本可持来云々、五日ニ遣状明日（六日）可下向之由申遣之、（先日以三級尋申仙洞之處、于今ヲ可聞定之由存之故也、仍以状相尋於三級之處、御失念之由也、仍明日可下向之示楽遣了、）駿府之返状等調之間、又遅々、（『中院通村日記』）

【主要事項】通村のもとに、石川忠総より書状が届く。伊勢国にあるという「定家卿真筆古今集」は、良庵が申すには仏眼院春豪で千年も見参に入るもので、後水尾院（仙洞）が真筆としたものだという。

石川忠総は、通村に「定家卿真筆古今集」について、真筆ならば買いたい旨を伝える。後水尾院（仙洞）にこれを申し入れたところ忘れたという。淺澤又三郎へ書状を送り、良庵に届いた返事によると、明日、伊勢へ下向し、「定家卿真筆古今集」を持ってくるそうだ。

※石川忠総が、通村に鑑定を依頼したものである。両者の間を良庵や淺澤又三郎という人物が仲介をしていたようである。

【主要人物】石川忠総…前掲。

後水尾院…前掲。

良庵…前掲。

≪元和二年（一六一六）三月十一日≫

絵師庄左衛門来、行幸絵両所令書下絵、（『中院通村日記』）

【主要事項】通村のもとに、絵師の土佐勝左衛門（庄左衛門）が来て、行幸の下絵を描かせた。

※前田利常の依頼による絵巻形式の「源氏絵」の下絵と思われる。

【主要人物】土佐勝左衛門…前掲。

≪元和二年（一六一六）三月十三日≫

自長橋局右京大夫来示予云、松屋興以来之由也、則申付夜前之事、御貝十、令於絵書給、武者絵草花等也、本二被見下、一蓑（葦カ）屋絵、（鹿一足、紅葉二三葉無枝、）一三甫、（永徳弟子、一雲ト云者弟子也云々、）又召経師藤蔵、右近道イ、是又於清所申付之、源氏本料帋令重之、（如三本也、）仍予源氏本取寄遣之、御本色々スキ色ノ鳥子也、（『中院通村日記』）

今夕予之源氏本六七冊可申出之由甲出之由申之處、則全本返給了、但予本紅葉賀一冊不足、三本見分可遣之由仰也、三条家本在常御庇、仍則、メ候取出之、出御、何巻不足哉之由尋也、仍右之旨申之、則入御、三本遣了、此事日没已前之事也、（『中院通村日記』）

【主要事項】通村のもとに、長橋右局京大夫が来て、松屋興以が来ることを伝える。通村は、松屋興以に命じていた「武者絵草花等」の絵を貝に描かせた。また、経師の藤蔵、右近道を呼び、清所に申し付けた「源氏本料帋」を重ねさせた。御本は色々でスキ色の鳥の子である。

※経師の藤蔵に関しては、『中院通村日記』のほか、『時慶卿記』慶長十八年八月十日条などにおいても、本を綴じている記載がある。

【主要人物】松屋興以（生没年未詳）…土佐派の絵師と思われる。

藤蔵（生没年未詳）…経師。

右近道（生没年未詳）…詳細不詳。経師と思われる。

≪元和二年（一六一六）三月二十五日≫

今日法事、光明真言法修之、中御大、白川二位等来臨、（法嚫卅六人、歌仙之内廿二枚或人公家衆手跡所望之由申之、今朝朝いの程也、仍不對面、）（『中院通村日記』）

【主要事項】通村のもとに、法事で光明真言法修の中御大である白川雅朝王（白川二位）がやって来た。ある人が公家衆の筆跡を所望とのことである。

【主要人物】白川雅朝王（一五五五―一六三一）…白川二位。正二位・参議・紙祇伯となる。（野鳥、前掲『公卿大事典　普及版』）

≪元和二年（一六一六）三月二十七日≫

源氏絵、於随庵近年下京大炊道場御座頃、西山（松尾）山田村御座、（但暫時ノ義歟、）今日於大炊道場進使者相尋之處、御家人主馬充只今、今彼所参、於用者、早々可申云々、仍一巻進之、先日進之處、御留守之由申之、取而帰了、（依急々、先日之状、其儘進之、○下略）（『中院通村日記』）

賀茂（松下民部大輔也、）蕨進之、對面、色紙短冊（各三枚宛、）持来、宮門跡御手跡等、同傍輩衆手跡所望云（備前国松平宮内大甫、前大樹御孫也、故池田々、宰相息、彼宮内後見之男所望之由申之、）雖遅々可分之由答之、残重而可進由申之、（『中院村村日記』）

【主要事項】通村は、空性法親王（随庵）に出来上がった「源氏絵」の一巻を渡して、その不審を訪ねる。

松下大輔が「色紙短冊（各三枚宛、）」を持参して来た。宮門跡の筆跡などである。池田忠雄が同傍輩の筆跡を所望だという。

【主要人物】空性法親王…随庵。前掲。

松下大輔（生没年未詳）…賀茂七家のうちの松下家の人物と思われる。

池田忠雄（かつ）（一六〇二―一六三二）…淡路州本藩主、後に備前岡山藩二代藩主となる。（工藤、前掲『江戸時代　全大名家事典』）

≪元和二年（一六一六）三月二十八日≫

午下刻参青蓮院、（當年為御礼也、）去十四五日比有御信、（佐竹紙百帖、但卅枚ツクリ、悪紙也、）其後腫物再発、故于今延引也、其節闕疑抄返給、又借進於続古事談、（五冊一缺、）（『中院通村日記』）

自正親三黄門有状、古今（古筆、神妙手跡也、）上巻一冊、（鳥子鍮泥銀泥ニテ畫、雁又金銀之沙蒔之、）朗詠、（上一巻、）又続後撰歌十首許、（巻物、）此三種為誰人手跡哉、可目利之由也、是又翌朝不知見之由、以状返答了、（『中院通村日記』）

【主要事項】通村は、青蓮院尊純法親王（青蓮院）に参る。佐竹紙百帖を三十枚作る。悪紙である。「闕疑抄」を返した。また、「続古事談（五冊一缺）」を借進した。

通村のもとに、正親町三条実有（正親三黄門）から神妙な筆跡で鍮泥と銀泥で雁を描き、金銀の砂子が蒔かれている「古今」の上巻一冊、「朗詠（上一巻）」、「続後撰歌十首」の巻物について、誰の筆跡か鑑定してほしいという旨の書状が届く。翌日、誰の筆跡か分からないという返答の書状を出した。

【主要人物】青蓮院尊純法親王（一五九一―一六五三）…応胤法親王の子。青蓮院天台宗の門跡となった。書流は尊純流だが、青蓮院流の流れに含まれる。（小松、前掲『日本書蹟大鑑』第一六巻）

正親町三条実有（さねよし）（一五八八―一六三三）…正親三黄門。正二位・権大納言となった。家業は、有職故実、雅楽、衣文道。書流は、三藐院流。（小松、前掲『日本書流全史』上下）

≪元和二年（一六一六）四月朔日≫

自溝口伯耆守、同伊豆守状到来、無殊事云々、自豆州兎皮五枚到来、自伯州状ニ云、兎皮未到来、於到来可上云々、又伯州女中ヨリ短冊卅枚誂之、傍輩衆手跡所望云々、遣予之女中状誂之、則二日誂之、（中御門相公乳母ノ姪久右衛門下給上手也、去年為礼来、誂彼者也、則中御相公ヘ申遣之、）（『中院通村日記』）

【主要事項】通村のもとに、溝口宣勝（溝口白耆守）より兎皮がまだ届いていないという旨の書状が届く。また、溝口宣勝の女中から「短冊卅枚」

を誂えるため、傍輩衆の筆跡を所望されたので、下絵を書くのが上手な久右衛門という中御門相公（中御門資胤か）の乳母の姪の料紙を使用し、二日に誂えた。

※『中院通村日記』元和二年四月十三日条に、この日の短冊に関連する記載がある。

中御門資胤については、河田昌之氏が「源氏物語手鑑考」（前掲『源氏物語手鑑研究』）で見解を示している。

【主要人物】中御門資胤（一五六九―一六二六）…中御門相公が該当か。正二位・権大納言となる。書流は、中院流。（小松、前掲『日本書流全史』上下。小松、前掲『日本書蹟大鑑』第一四巻）

溝口宣勝（一五八二―一六二八）…溝口白耆守。越後国新発田藩二代藩主。（工藤、前掲『江戸時代　全大名家事典』）

良庵…前掲。

≪元和二年（一六一六）四月六日≫

自印盛状盛到来、（石川主殿頭状也、）先日良庵伊勢州ニ、有定家卿自筆古今集之由申之、内々石川殿令雑談之由、所望之由也、仍尋予之由申間、先度（廿一日）、木村越前守（盛勝）下向之時、遣状申送、彼事金廿枚云々、十四五程度ナラハ所望之由也、奥書等可下見之由有之、

（『中院通村日記』）

【主要事項】通村のもとに、印盛と状盛が石川忠総からの書状を持参してきた。

先日、良庵に申した伊勢国の「定家卿自筆古今集」について、代価が金二十枚であることを伝えたが、金十四、五枚程であれば所望するという旨であった。奥書等を下見するべきとのことであった。

※木村盛勝（木村越前守）が下向する際に書状を預けたようである。

【主要人物】石川忠総…前掲。

印盛（生没年未詳）…絵師か。

状盛（生没年未詳）…絵師か。

≪元和二年（一六一六）四月十三日≫

其後遣使者於白川可参歟之由申之、則可来云々、（短冊五枚書之、自溝口伯耆守女中誂之卅枚之内也、六人書之、）向白川亭、（右金吾、良庵帰宅、令祐甫指合等考之、）夕喰之後也、予一人食了之、（但顕成朝臣相伴、）食之暫而有盃酒、及剋許有音曲等、沉醉帰宅了、彼短冊卅枚之内五枚、（申竹門主、昨日申之處、則被染御筆、但親顕所望之由令申之、使親顕也、）五枚日野大、（十四日出来、）五枚四辻、（十三日出来、）五菊亭黄門（枚脱カ）、（十四日出来、）五枚永慶朝臣、（十四日出来、但下絵令顧到、）楚忽之事也、（『中院通村日記』一昨源氏詞改正之事申入於竹門主、（松平筑前守巻物也、）竹門主則令書改送給之、（十二日残三巻、依御所望進之、十三日）四辻相公、羽林ヘモ遣之令書続之、則到来也、（『中院通村日記』）

【主要事項】通村が、溝口宣勝（溝口白耆守）の女中から依頼された短冊について、曼殊院良恕法親王（竹門主）、日野資勝、四辻季継、今出川経季（菊亭黄門）、高倉永慶、通村の六人が、それぞれ五枚ずつ書写した。曼殊院良恕法親王が書写した短冊を北畠親顕が所望し、そちらに使わした。高倉永慶から通村のもとへ送られてきた短冊は、下絵の天地が逆に使用されていた。

通村は、源氏詞について、曼殊院良恕法親王に詞書の改正を申し入れて送り返してもらった。四辻季継、羽林の分も送られてきた。

【主要人物】溝口宣勝…前掲。

曼殊院良恕法親王…竹門主。前掲。

日野資勝…前掲。

四辻季継…前掲。

高倉永慶…前掲。

今出川経季（一五九四―一六五二）…五菊亭黄門。正二位・右大臣となる。家業は琵琶。書流は中院流。（小松、前掲『日本書流全史』上下。小松、前掲『日本書蹟大鑑』第一六巻）

北畠親顕（一六〇三―一六三〇）…正四位下・参議となる。中院通勝

の次男。通村の弟。北畠具教の養子として北畠家を継ぐ。家業は有職故実。書流は中院流。（小松、前掲『日本書流全史』上下。小松、前掲『日本書蹟大鑑』第一五巻）

≪元和二年（一六一六）四月二十四日≫

良庵来、見於千載集下巻一冊、定家卿自筆云々、美濃大和問、ハシ切離了、以定家卿自筆令臨写者乎、但奥書自筆之由書之、奥書共以写歟、見誤歟、奥書名字誰人哉不知之、昨日御霊別當祐好件本之上巻見之、併上巻者先年所見之者也、先考御在生之時也、為臨写歟之由答之、件上巻ハ、竹田後家所持云々、彼女者宗養女也云々、自宗養許彼本令相伝云々、又昨日要法寺日就（信行寺）、後拾遺本一冊、（全部歌一行）持来、了佐（町人）、定為法印手跡之由申之云々、似定為卿手跡形儀有奥書、名字朽損、（『中院通村日記』）

【主要事項】通村のもとに良庵が訪ねてきて、定家卿自筆だという「千載集下巻一冊」を見る。通村は、美濃判の大和綴じで、端が切り離されていることから、定家卿自筆を臨写したものだろうかとしている。また、奥書に自筆と書いてあり、これも写しか、見誤りか、奥書の名は誰か不詳である。昨日、通村は、「御霊別當祐好件本之上巻」を見る。これは、父の在世中に見たことがあるもので、上巻は竹田後家の養女が宗養より相伝したものだという。また、昨日、通村のもとに要法院の日就が、歌が全部一行の「後拾遺本一冊」を持参してきた。了佐が藤原定為（定為法印）の筆跡であると申したもので、定為の筆跡に似た奥書があった。名字は、朽損していた。

【主要人物】良庵…前掲。

宗養（一五二六―一五六三）…連歌師。

日就（一五六七―一六三二）…日蓮宗の僧侶。

古筆了佐…前掲。

≪元和二年（一六一六）五月七日≫

晝之間番誂親顕為書源氏詞也、自初子至野分六段也、初子、ュ蝶、螢三段申入、於青蓮院僧正（尊純）、常夏、篝火、野分書之、右金吾、印盛入来、於印盛予招之、源氏詞間ニ合鳥子金銀泥下絵也、仍以燒筆上下（并）立界令懸之、祐好来、日没之後各分散、（『中院通村日記』）

【主要事項】北畠親顕が誂えた源氏の詞書について、青蓮院尊純が初音、胡蝶、螢の段、高倉永慶（右金吾）が常夏、篝火、野分の段をそれぞれ書写する。通村のもとに印盛が来る。源氏の詞書の間に合い紙の鳥の子に金銀泥の下絵、すなわち、焼筆で上下の罫線と縦の界線を描かせた。祐好が来た。

【主要人物】高倉永慶…右金吾。前掲。

青蓮院尊純法親王…前掲。

北畠親顕…前掲。

印盛…前掲。

祐好（生没年未詳）…詳細不詳。

≪元和二年（一六一六）五月十二日≫

上格子之後参御前、（依召）一昨日（ヤ）（タ）有御当座御製、（二首）予、（一巻頭）水前宰相（一）題予書之、（也）白紙一枚加之處、予取之了、御製夜前出来、仍今朝清書也、題各自筆、其後退出、今朝受請取、顕成朝臣、予巳上刻許退出了、（『中院通村日記』）

【主要事項】御当座御製があり、通村が題を書き、鬮を取った。白紙を一枚加えたところ、通村がこれを取った。御製は夜に出来、今朝清書をした。題は各自筆でその後退出した。白川顕成王のものも今朝受け取った。

【主要人物】白川顕成王（一五八四―一六一八）…従四位上・紙祇伯・左近衛中将となる。（野鳥、前掲『公卿人名大事典　普及版』）

≪元和二年（一六一六）五月十□日（十二日の次の日の条）≫

甫竹来、彼伊勢国古今持来、（不正筆）、以定家卿自筆似書者歟、戸部尚書藤、判、（批判ノ字磨也、）又此奥書裏ニ嘉禎二年月日、（失念）以前中納言、（此末悉磨也、）良庵云、此已前ニ見之者ノ云、三位書之ト在之申由之云々、此嘉禎奥書各別手跡也、則向冷泉黄門亭可見之云々、仍予相副状（日付昨日分也、）対面、定為法印手跡歟ト云々、予謂為定為法印手跡、何書嘉禎年之号、又彼嘉禎号、手跡為各別哉、件法印定家卿手跡形儀相似物也、此古今（マヽ）此集家々称之、奥書ヨリ以下、定家卿手跡ニ不相似者也、予推而云、若後堀河院民部卿典待歟、此人被似書彼手跡者多之由、度々彼卿被語之、又三位書之ふと奥書ニ見之由申之間、彼局可為三位之条勿論也、（『中院通村日記』）

【主要事項】通村のもとに甫竹が、定家卿自筆だという「伊勢国古今」を持参してきた。これを見たところ、「不正筆」であった。この奥書の裏に嘉禎二年と月日がある。良庵が申すには前にこれを見たもの曰く、三位の書と申したという。嘉禎の奥書は別筆と思われたので、冷泉為満（冷泉黄門）に書状を出して聞いたところ、「定為法印手跡歟」と判を下した。通村は、定為法印の筆跡ならば、なぜ嘉禎の年号を書いたのか、また嘉禎の年号は別の筆跡ではないだろうか、定為の筆跡は定家に似ている、これはこの家の人物である、といった疑問を投げかけている。また、奥書より以下について、定家卿の筆跡に似ていない人物の書であり、推測するに、若後堀河院民部卿の筆跡ではないかとし、冷泉為満も若後堀河院民部卿筆の本が多いと常に申している。また、「三位書之」とあるのももっともではないかという見解を示す。

【主要人物】甫竹（生没年未詳）…茶杓師。

良庵…前掲。

冷泉為満（一五五九―一六一九）…冷泉黄門。正三位・権大納言となる。上冷泉家九代当主。家業は和歌。書流は定家流。（小松、前掲『日本書流全史』上下。小松、前掲『日本書蹟大鑑』第一四巻）

≪元和三年（一六一七）五月十三日≫

未刻許宗磵（篠屋）来、自去年十月下向加州、松平筑前守（加賀宰相（利光、後利常））東關下向故、令上洛云々、去年歟、就予被求源氏抄、其事等言談、文字少ノ、義理分明之抄物所望云々、難計会之由答之、然共明星抄可書遣之旨示之、予猶令新作授與者、可為祝著之由、自去年年内々被示之、雖然、公私不得隙之間難叶、於得隙者、予亦内々可抄出之義、挿心中之由答之、（『中院通村日記』）

【主要事項】通村のもとに、篠屋宗磵が訪ねてきて、前田利常から、文字が少なく意味が分かりやすい源氏の注釈を求められるが、用意し難いこと、代わって「明星抄」（三条西公条の源氏聞書）を写して送る旨を伝える。また、隙を見つけて抜書きを心がけることを伝える。

【主要人物】篠屋宗磵（生没年未詳）…京都の儒学者、文学者。（長坂成行『篠屋宗磵とその周縁―近世初頭・京洛の儒生』汲古書院、二〇一七年）

前田利常…前掲。

≪元和三年（一六一七）九月二十二日≫

法華經、（宸筆、但御代不分明）古今序真名（伏見院）、先日見之、予依所所望、重取寄之、古今キレ（後撰相交）、大略行成筆歟之由存候、（『中院通村日記』）

【主要事項】通村は、御代不明の宸筆「法華經」、伏見院筆「古今序真名」を見た。かねてより所望するところにより、取り寄せた。「古今キレ（後撰相交）」は、行成筆とする。

≪元和四年（一六一八）六月八日≫

乙丑、晴、為御書籍校合召候衆、先奉行西園寺中納（公益）―（言、下同ジ）・菊亭中納―・中院宰（相）―・冷泉少將（為賴）・五条（為適）・東坊城（長維）・西坊城（遂長）・予（秀相）・舟橋九人也、手伝代衆ニハ日野大納言（資勝）・同宰相（光慶）・西堂院（時慶・時直）父子・烏丸弁（光賢）・飛鳥井、以上十五人也、長櫃九ツ、御書籍之」部類、又ハ類本叟類相分、目録匡合仕立候、今日半仕候、残明日可仕候、（『泰重卿記』）

【主要事項】土御門泰重は、通村を含めた十五人で、御書籍整理、分類目録を成す。
【主要人物】土御門泰重（一五八六―一六六一）…従二位となる。家業は、天文、歴、陰陽道。書流は、中院流。（小松、前掲『日本書流全史』上下。野鳥、前掲『公卿人名大事典　普及版』）

≪元和四年（一六一八）六月九日≫
丙寅、晴、御書籍目録及薄暮仕立候、中院・予召御学文所、目録之様子申上候、各退出也、（『泰重卿記』）
【主要事項】土御門泰重は、通村と御学問所に召され、目録の様子を伝えた。
【主要人物】土御門泰重…前掲。

≪元和四年（一六一八）六月十二日≫
巳巳、大風雨、飯後朝参仕候、主上清涼殿・紫宸殿出御、一編書籍御覧以後入御也、予・中院御前在之也、未刻許ニ奥御倉より長櫃五十八取出申候、重物入候と相見、持かね申候、是ハ二階より下也、其下より長櫃十許、」其外御道具三十色ほと取出也、皆骨折候也、殊無人、内々衆まて也、外様衆ニハ予一人まて也、御振舞二度也、（『泰重卿記』）
【主要事項】土御門泰重は、天皇書籍蟲佛の状を御覧する。また、通村とともに奥御倉から「長櫃五十八」取り出した。重いものが入っているようで持ちかねた。これは、二階より下に運んだ。その下より「長櫃十許」、その他「御道具三十色」ほどを取り出す。
【主要人物】土御門泰重…前掲。

≪元和五年（一六一九）六月二十四日≫
乙亥、相詰申候、不足切々ノ御本穿鑿、中院（通村）ト仕候、相かため申候、（『泰重卿記』）
【主要事項】土御門泰重は、通村と御書籍の整理に参仕する。
【主要人物】土御門泰重…前掲。

≪元和六年（一六二〇）三月五日≫
従禁中書籍奉行衆召、則朝参申候、御倉書籍共、御殿離タル巽御倉入替申候、終日骨折申候、召之衆廿人餘なり、（『泰重卿記』）
【主要事項】土御門泰重、通村らは、禁裏御書籍を巽御倉に移す。
【主要人物】土御門泰重…前掲。

≪元和六年（一六二〇）九月十日≫
従女院御所關東紙十束入箱拝領也、晩炊以後為御礼伺公申候、又大御酒被下候、及深更退出候、今日従禁中申出候予継十冊、従中院請取申候也、（『泰重卿記』）
【主要事項】土御門泰重は、「關東紙」を女院より拝領する。通村から「予継十冊」を受け取る。
【主要人物】土御門泰重…前掲。

≪元和六年（一六二〇）九月十七日≫
予・西洞院宰相（時慶）相伴申候、僧衆退出以後、予・中院巽御蔵御籍取出、御所へ進上申候、（『泰重卿記』）
【主要事項】土御門泰重と通村は、「巽御蔵御書籍」を取出して進上する。
【主要人物】土御門泰重…前掲。

≪元和七年（一六二一）二月十三日≫
中院へ詩集遣候、本写共、御番伺公、続世継二枚写申候、入夜召御前、供御之御そは被下候、其以後御淺水御舟めし御遊山也、（『泰重卿記』）
【主要事項】土御門泰重は、通村へ詩集を送る。番所にて「続世継二枚」を書写する。
※『泰重卿記』元和七年二月十二日条では、「甲申、晴、詩集今日書写

終、」とある。

【主要人物】土御門泰重…前掲。

≪元和七年（一六二一）四月十日≫

辛巳、晴、禹詠題十、哥二十首清書仕、中院殿遣候、夏中之百首日課也、從一日到十日十日相きり清書依定也、未少雨気、頓而晴也、晩一乗院殿御見廻申入候、御留守申置也、中院参、哥物語、及深更帰宅也、（『泰重卿記』）

【主要事項】土御門泰重は、「禹詠題十」、「哥二十首」を清書し、通村へ送る。

【主要人物】土御門泰重…前掲

≪元和九年（一六二三）十一月二十七日≫

今未刻斗筑波ノ知足院入来、観智院同道也、チリメン一巻恵之古筆古今被見之可然者也、之筆者不知之、（『中院通村日記』）〈句読点、筆者〉

【主要事項】通村のもとに、知足院と観智院が来て、「古筆古今」を見たが、筆者は不明である。

【主要人物】知足院…詳細不詳。僧侶と思われる。
観音院…詳細不詳。僧侶と思われる。

≪元和九年（一六二三）十二月二日≫

及黄昏藤蔵（経師）来、自加州書物表紙被誂之、仍申付、サヽヤ甚蔵（宗磡子）今朝來、然而経師依遅参帰宅也、仍又以使者招之、亥下刻経師帰了、表紙絹等打裏貼付之後帰之、甚蔵先是帰宅了、（『中院通村日記』）〈句読点、筆者〉

抑自加州本共到来、続後撰（為重卿筆有奥書）、新続古今（栄雅様筆也不知之）、恵慶集（端定家卿、奥同嫡女筆）、入道右大臣集、堀河右大臣殿、古筆之者不知之、中央有定家卿筆恵慶集写留之、自三丁目至奥命弟令写之、今日一括余出写、一括之分不違文字、（『中院通村日記』）〈句読点、筆者〉

【主要事項】通村のもとに、経師の藤蔵が来る。前田利常（加州）から依頼された書物の表紙を誂える件を申しつけた。今朝、篠屋宗磡の子の甚蔵が来たが、藤蔵の到着が遅かったために一度帰宅していたので、呼び出して、表紙の絹等の裏打ちと貼り付けを行った。

前田利常（加州）から「続後撰（為重卿筆有奥書）」、「新続古今（栄雅様筆也不知之）」、「恵慶集（端定家卿、奥同嫡女筆）」、「入道右大臣集」の書物が届いた。「恵慶集」の中央にある定家卿筆を写し留める。三丁目から奥書までは、弟の北畠親顕に書写させた。今日余りと一括して写した。

※甚蔵は、紙や絹などの書物の装丁を整えるためのものを持参し、藤蔵が表紙の裏打ちと貼り付けを行ったものと思われる。利常は、通村に書物表紙の誂えを依頼している。その際に、通村と北畠親顕が「恵慶集」を分担して写し留めたようである。元和九年十二月六日条、九日条、十日条、十五日条、十六日条、十七日条に関連する記載がある。

この日の条に見える「恵慶集」は、中村記念美術館に所蔵されている。上下巻のうち下巻は、定家と嫡女民部卿の筆になるものであるが、上巻は通村、烏丸光広、松花堂昭乗、小堀遠州によって分担書写されたものである。「入道右大臣集」は、前田育徳会に所蔵されている。

【主要人物】前田利常…加州。前掲。
藤蔵（生没年未詳）…前掲。
甚蔵（生没年未詳）…篠屋宗磡の子。
北畠親顕…前掲。

≪元和九年（一六二三）十二月六日≫

今日、恵慶集定家卿筆並嫡女民部卿典侍歟手跡、各一枚写之、端一枚（スキウツシ也）、先日写之、余命少弟、令書之、スキウツシ烏子ヲ五ツニヘキテ写之、又、入筆右大臣堀川集、同写之、端予書之、似之、奥

命親顕朝臣、至夜終功、(『中院通村日記』)〈句読点、筆者〉

【主要事項】通村は、「恵慶集」の定家卿筆と嫡女民部卿の各筆をそれぞれ一枚ずつ透き写しをした。弟の北畠親顕にも命じて書写させた。鳥の子の紙を五枚に剥いで透き写した。「入筆右大臣堀川集」も同じく写し、端は通村が似るように書写し、他は、北畠親顕に命じた。

※同じような事例で「九条殿御集」の末尾に、北畠親顕が一丁分を好き写ししたと考えられるものが貼り込まれている。これは、通村の奥書によると、通村が北畠親顕に命じて写本を制作させたものであった。笠嶋忠幸氏は、定家自筆の状態を視覚的に記録する目的でスキウツシしたものであるとしている。(笠嶋忠幸『日本美術史における「書」の造形史』笠間書院、二〇一三年)

【主要人物】北畠親顕…前掲。

≪元和九年(一六二三)十二月十日≫

経師藤蔵来、加州本共令閇之、至晩恵慶集、続後撰等閇之、新続古今上下切之、(『中院通村日記』)〈句読点、筆者〉

甚蔵来、偏易白来書籍等有勘之事、予改元記外ニ見之、友浦短冊持来、後土門院二、邦高親王二、義政公一、教国門二、静覚本寺ノ宮、為康五条為経門父、其外不覚悟廿枚斗有之歟、(『中院通村日記』)〈句読点、筆者〉

【主要事項】通村のもとに、藤蔵が訪ねて来て、加州本の「恵慶集」、「続後撰」等を綴じ、「新続古今集」の上下を切りそろえた。通村のもとに、甚蔵が訪ねて来て、偏易が手に入れた書籍を勘案することがあり、「改元記」などを見た。

友浦が「後土門院二、邦高親王二、義政公一、教国門二、静覚本寺ノ宮、為康五条為経門父、」その他二十枚ほどあろう短冊を持参してきた。

【主要人物】藤蔵…前掲。

甚蔵…前掲。

偏易(生没年未詳)…大徳寺の瑞峯院の僧侶で、後に龍安寺の霊光院に入る。茶人としても知られた人物だという。書流は光悦流。(長坂、前掲『篠屋宗磵とその周縁―近世初頭・京洛の儒生』)

友浦(生没年未詳)…詳細不詳。

≪元和九年(一六二三)十二月十五日≫

予吐却之後参内、恵慶集、入道右大臣集、続後撰等備叡覧、以書付可申之由仰也、仍如仰書付箱ニ封ヲ著進了、帰了、明朝可返下給之由申之、(『中院通村日記』)〈句読点、筆者〉

【主要事項】通村が参内し、水尾院が「恵慶集」、「入道右大臣集」、「続後撰」等を叡覧、後水尾院が仰る通り、その旨を箱に書付けた。

【主要人物】後水尾院…前掲。

≪元和九年(一六二三)十二月十六日≫

跡より甚蔵令持之、向彼度宿旅渡之云々、是入道右大臣集ノ箱出来之間達行也、又予青侍二人、下人二人、送甚蔵遣之、(『中院通村日記』)〈句読点、筆者〉

【主要事項】あとから「入道右大臣集ノ箱」が出来、通村は、宿へ届けるために、甚蔵、青侍二人、下人二人を遣わした。

※ここでは、渡した相手が判明しないが、前田利常のもとに返されたものか。

【主要人物】甚蔵…前掲。

≪元和九年(一六二三)十二月十七日≫

予少食之時、有召集黒戸、一昨夜古筆等被御覧御満足之由被謝仰、(『中院通村日記』)〈句読点、筆者〉

【主要事項】一昨日、古筆等を御覧になって満足した旨を伝えられる。

※元和九年十二月十五日条で、後水尾院は前田利常が所持する「恵慶集」、「入道右大臣集」、「続後撰」等を叡覧している。よって黒戸に召集したのは後水尾院と考えられる。

【主要人物】後水尾院…前掲。

≪寛永三年（一六二六）十一月二十一日≫

抑今夜児御衣調進之事、園太記云、今夜無御衣案蓋例也云々、（中略）関白返答云、（中略）予所持之記、九夜威儀御膳児御衣菓子湯漬略之、如此候、（中略）此記之事、去十七日為頼朝臣談云、明月記依御所望借進云々予依聞此事如此相尋者也、被覧件記之歟、（『中院通村日記』）〈句読点、筆者〉

【主要事項】通村は、為頼から、近衛信尋（関白）の求めに応じて、「明月記」を借し出したことを伝えられる。

※「明月記」（冷泉家時雨亭文庫所蔵）は、途中が断絶しているが、二十五年分を存する。

【主要人物】冷泉為頼（一五九二―一六二七）…冷泉為満の子。上冷泉家一〇代当主。従三位・権中将となった。書流は、定家流。（小松、前掲『日本書流全史』上下。小松、前掲『日本書蹟大鑑』第一四巻）

近衛信尋（一五九九―一六四九）…近衛信伊の養子。後陽成院の第四皇子。左大臣、右大臣を経て関白となった。書流は、三藐院流。（小松、前掲『日本書流全史』上下。小松、前掲『日本書蹟大鑑』第一六巻）

≪寛永三年（一六二六）十二月二日≫

斎宮女御之集、書終、先日書始之、其後打於夜中終功、哥二行書之、本八九丁歟、（『中院通村日記』）〈句読点、筆者〉

【主要事項】通村は、歌が二行書、本が八九丁の「斎宮女御之集」を書写する。

※「中院家蔵書目録」（京都大学付属図書館所蔵）の中には、「斎宮女御　一」とあり、関連が考えられる。前田利常の頃に前田家の所持となった「斎宮女御集」（「小島切」）が、前田育徳会に伝存しており、それとも関連が考えられる。

≪寛永四年（一六二七）三月四日≫

則予参内為申出、古今本為也下冷泉家相伝之本定家卿自筆為兼卿為相卿等奥書也、今仙台中納言政宗卿令所持、去年以泰重朝臣被借召、仍令俟臨写給也、（『中院通村日記』）〈句読点、筆者〉

又夜前彼卿語云、古今事他人相交可然歟之由、又先度申之間、昨日申入了、誰人ニテモ相交可然者、可相交之由仰云々、予申云、御本不被急者、予一筆可書立、内々当年中不苦之由、泰重朝臣申之間、重而此趣可申入之由示之、其事今朝又申入之由也、其後退出了、（『中院通村日記』）〈句読点、筆者〉

【主要事項】通村は、伊達政宗が所持する下冷泉家相伝の定家自筆で、為兼卿、為相卿等の奥書を有する「古今本」を臨写する。これは、去年、土御門泰重が借用したものである。

※伊達政宗旧蔵の「伊達本古今和歌集」（安藤積産株式会社所蔵）がこれに該当する。また、「中院家蔵書目録」（京都大学付属図書館所蔵）に、「定家卿自筆古今和哥集奥書写　一」とある。

【主要人物】伊達政宗（一五六七―一六三六）…仙台藩初代藩主。書流は、定家流。（小松、前掲『日本書蹟大鑑』第一五巻）

土御門泰重…前掲。

中御門宣衡…彼卿が該当か。前掲。

≪寛永十四年（一六三七）六月二日≫

行于四辻亞相（季継）、木綿踏皮三足持参。依所勞、不對談也。行于中院亞相（通村）、對談也。短冊五枚被染筆事、頼也。（『隔蓂記』）

【主要事項】鳳林承章は、通村に「短冊五枚」の揮毫を依頼する。
【主要人物】四辻季継…前掲。
鳳林承章（一五九三―一六六八）…臨済宗の僧侶。鹿苑寺（金閣寺）の住職、相国寺の九五世となる。（小松、前掲『日本書蹟大鑑』第一八巻）

≪寛永二十年（一六四三）十一月五日≫

明飯後、直可赴于小出大和守殿（吉英）之宿之故也。於岡玄番（蕃）所、而掛物者中院大納言通村之筆也。後〇（成）院與中院入通勝之詩歌也。道勝者也足之事也。（『隔蓂記』）
【主要事項】鳳林承章は、小出吉英の宿へ赴く。岡玄蕃所の掛物は、通村の筆であった。
【主要人物】小出吉英（一五八七―一六六六）…但馬出石藩二代藩主、および四代藩主。出石藩小出氏三代。和泉和田藩三代藩主。（工藤、前掲『江戸時代　全大名家事典』）
鳳林承章…前掲。

≪正保四年（一六四七）十一月二十九日≫

齋了、赴中院内府（通村）公也。先以任官之祝義（儀）并自以錐（慶彦）公、被頼、家隆筆之伊勢物語之一冊、令見之也。可正偽真之故也。為可有閑覧、伊勢物語一冊、於内府公、而預置、帰也。（『隔蓂記』）
【主要事項】鳳林承章は、通村を訪ねて、文雅慶彦（錐公）より依頼された「家隆筆之伊勢物語之一冊」の鑑定を依頼する。
※「家隆筆之伊勢物語之一冊」に関する記載と分かるものが、『隔蓂記』正保四年十二月十五日条、二十九日条、慶安元年三月十日条、五月十二日条、五月二十日条に見える。
【主要人物】鳳林承章…前掲。
文雅慶彦（けいげん）（一六二一―一六九八）…相国寺住持、鹿苑寺四世となった僧侶。

≪正保四年（一六四七）十二月十五日≫

齋了、赴中院前内府（通村）公、歌書奥書之事頼申故也。（『隔蓂記』）
【主要事項】鳳林承章は、通村のもとへ訪れて歌書の奥書を依頼する。
【主要人物】鳳林承章…前掲。

≪正保四年（一六四七）十二月二十九日≫

中院前内府（通村）公以瑞春之宣（集言）首座、有伝言、今度頼申歌書奥書之事也。依然、及黄昏、雖赴前内府公、御也出故、不對顔、以書付、申置、帰也。（『隔蓂記』）
【主要事項】鳳林承章は、今度依頼する「歌書奥書」について瑞春之宣首座の伝言を預かり、通村を訪ねたが、留守だったので書付を置いて帰宅した。
【主要人物】鳳林承章…前掲。
瑞春之宣（集言）首座…相国寺塔頭である端春院の僧と思われる。

≪慶安元年（一六四八）三月十日≫

齋了、赴于中院前内府（通村）公、伊勢物語之奥書之本、先日御書続、自妙法院御門主（堯然）、出来之本令持参、奥書之義（儀）頼申入也。（『隔蓂記』）
【主要事項】鳳林承章は、通村のもとに妙法院堯然法親王（妙法院御門主）の先日書き継いでいた「伊勢物語之奥書之本」を持参し、奥書の揮毫を依頼する。
【主要人物】妙法院堯然法親王（一六〇二―一六六一）…後陽成院の第六皇子。妙法院の門跡となる。書流は中院流。（小松、前掲『日本書流全史』上下）
鳳林承章…前掲。

≪慶安元年（一六四八）五月二十日≫

自中院前内府通村公、尊翰到来、内々頼申伊勢物語之奥書之案文下書給之也。及晩、而奥書出来、為持、給也。壬生二位家隆卿真筆之伊勢物語之壹冊之奥書也。破損之所者、妙法院宮二品法親王堯然公之御書続也。自前内府公之使者、山本左兵衛丞（丞）云仁也。於晴雲軒、而相對、浮一盞也。歌書請取之手形予書之、而遣也。（『隔蓂記』）

【主要事項】鳳林承章のもとに通村から書簡がきて、依頼していた「伊勢物語之奥書之案文下書」を受け取った。晩に及んで、奥書が出来た。「壬生二位家隆卿真筆之伊勢物語之壹冊」の奥書で、破損したところは、妙法院堯然親王筆である。通村の使いは、山本左兵衛丞（丞）云仁である。

【主要人物】鳳林承章…前掲。

山本左兵衛丞（生没年未詳）…通村の使者のようだが詳細は不詳。

≪慶安元年（一六四八）五月二十一日≫

齋了、赴中院前内府（通村）公、内々頼申家隆卿真筆之伊勢物語之奥書、昨晩出来故、為其礼、白晒平帷子壹ケ・富田酒両樽令持参也。前内府公對顔也。（『隔蓂記』）

【主要事項】鳳林承章は、通村のところへ、「家隆卿真筆之伊勢物語之奥書」のお礼のため、「白晒平帷子壹ケ」と「富田酒両樽」を持参した。

【主要人物】鳳林承章…前掲載。

≪慶安三年（一六五〇）四月二十八日≫

宣首座（集座）為中院前内府（通村）公之使、於晴雲軒、而来過、米元章筆之掛物・同巻物被持来也。掛物者點付可為参之由、自前内府公、御頼也。（『隔蓂記』）

【主要事項】鳳林承章は、通村から「米元章筆之掛物・同巻物」を借用する。

※『隔蓂記』慶安三年四月二十九日、五月二日、三日条に関連の記載が見える。

【主要人物】鳳林承章…前掲。

≪慶安三年（一六五〇）四月二十九日≫

一昨日自中院前内府公、来米元章筆之一軸令持参、前内府公江令返納也。（『隔蓂記』）

【主要事項】鳳林承章は、通村に借用していた「米元章筆之一軸」を返却した。

【主要人物】鳳林承章…前掲。

≪慶安三年（一六五〇）五月二日≫

到中院前内府（通村）公、而短尺（冊）三枚被染（揮）貴豪事申入、米元章墨痕之點持参、對面。（『隔蓂記』）

【主要事項】鳳林承章は、通村に「短尺（冊）三枚」の揮毫を依頼するとともに、「米元章墨痕之點」を持参する。

【主要人物】鳳林承章…前掲。

≪慶安三年（一六五〇）五月三日≫

元章墨跡返進之状相調、獻中院前内府（通村）公也。（『隔蓂記』）

【主要事項】鳳林承章は、「元章墨跡」の返却に関する状を整え、通村へ送る。

【主要人物】鳳林承章…前掲。

≪慶安三年（一六五〇）十二月十一日≫

先到中院前内府通村公、而見舞也。黄柑壹籠貳百入令持参也。伏見院之宸翰雑藝被遊之二枚令持参、令見之。則　伏見院御正筆之由、前内府公御申也。（『隔蓂記』）

【主要事項】鳳林承章は、通村に「伏見院之宸翰雑藝被遊之二枚」を見せ、正筆の由を伝えられる。

【主要人物】鳳林承章…前掲。

≪慶安四年（一六五一）九月二日≫

到中院前内府通村公、則對面、令見古筆也。（『隔蓂記』）

【主要事項】鳳林承章は、通村の邸宅を訪れ、「古筆」を見る。

【主要人物】鳳林承章…前掲。

≪承應元年（一六五二）十二月二十八日≫

従大徳寺之什首座（宗什）、被頼古筆之歌書、令見前内府公。筆者不知也。短尺貳枚（冊）前内府公江（越）頼申入也。従舟〇外記、頼短冊也。（『隔蓂記』）

【主要事項】大徳寺の宗什は、「古筆之歌書」を通村に見せた。筆者は不明とのことである。「短尺貳枚（冊）」の揮毫を通村に依頼する。舟越外記から依頼の短冊である。

【主要人物】鳳林承章…前掲。

宗什（生没年不詳）…大徳寺の僧侶か。

舟越外記（生没年不詳）…北条氏重の内にあたる人物。

≪万治三年（一六六〇）十二月十四日≫

令参　院、鶯茸之干一包持参、奉獻上、先日柴田良宣江二巻拝領、拙僧迄忝奉存之旨、申上也。雖可有　御對面、則今禁中御幸被遊之旨也。狂句之一順、予對可仕之仰也。偏（變）易所持八代集者、堀川宰相具世卿之一筆也。古今集之下巻不足、中院内府通村公被書下巻、被補闕也。右之下巻於仙洞、而有之由、偏（變）易承及、被頼予、而相窺度之旨、依被申、而去年相窺。則御穿鑿被遊、若於有之者、可被下之　仰。此比下巻　御尋出故、今日被　仰出、被下間、可遣于偏易之旨　仰、而下巻予請取、令帰出也。近日可渡于偏（變）易也。（『隔蓂記』）

【主要事項】偏易が所持する「八代集」は、堀川具世の筆である。「古今集之下巻」は不足していたが、通村によって補われた。鳳林承章は、偏易から、下巻が仙洞にあること知ったので後水尾院に尋ねるよう依頼された。後水尾院は、下巻を偏易に下賜するために探し出し、それを受け取った。近日、偏易に渡すつもりである。

※この堀川具世筆「八代集」は、宮内庁書陵部に現存する。通村が加加えた奥書（慶長十六年とある）には、堀川具世筆であること、「花詞集」は別筆であること、「古今集」の半分を補って書写したことなどが書かれている。また、『大雲山誌稿』二一には、宗硯が通勝に鑑定を依頼したこと、半分欠けていた「古今集」を通村が書写した旨が記載されている。この宗硯が所持していた「八代集」のうち、何らかの経緯を経て「古今集」下巻は仙洞、他は偏易の手に渡っていた。『隔蓂記』万治三年十二月十七日条にこの日の続きの内容が見える。

長坂、前掲『篠屋宗硯とその周縁―近世初頭・京洛の儒生』でも述べられている。

【主要人物】鳳林承章…前掲。

後水尾院…前掲。

偏易…前掲。

≪万治三年（一六六〇）十二月十七日≫

斎了、赴龍安寺之偏（變）易老也。篠屋宗硯所持之八代集者、堀河具世卿之筆也。古今集上（下）巻者不足、而中院通村公之先被書足也。上（下）巻者　仙洞文庫有之由、内々偏（變）易承故、依被頼予、而去冬御物語申上處、仙洞仰、内々被　聞召也。上（下）巻者先年宗硯息宗栄時、被下之様被　思召之旨也。近頃御穿鑿被遊。則上（下）巻依有于　禁中、而即仙洞江被　仰請、去十四日於予、被　仰下、上（下）巻被下候間、偏（變）易江可遣之旨、仰也。依然、今日令持参、古今上（下）巻具世卿一冊渡偏（變）易也。偏（變）易忝被致頂戴也。（『隔蓂記』）

【主要事項】鳳林承章は、龍安寺の偏易のところへ赴いた。篠屋宗硯所持の「八代

集は堀河具世筆である。不足していた「古今集上巻」[下]を、以前通村が補写した。鳳林承章は、上巻が仙洞御文庫にある旨を聞いた偏易に頼まれて後水尾院に伺った。後水尾院は、上巻は、篠屋宗磵の子である宗栄に下賜したとのことであったが、禁裏にあることが分かった。十四日、鳳林承章は、後水尾院から預かった上巻を偏易に渡した。偏易は、有難く頂戴した。

※「古今集上巻」は、下巻の誤りであると思われる。承章を介して偏易の所持するところとなった。

【主要人物】鳳林承章…前掲。

後水尾院…前掲。

偏易…前掲。

篠屋宗磵…前掲。

宗栄…篠屋宗磵の子。同じく宗磵の子である甚蔵と同一人物か、兄弟かは確認されていない。

主要参考文献

・『十五番歌合：尊経閣叢刊』育徳財団、一九三二年。

・『恵慶集：尊経閣叢刊』育徳財団、一九三五年。

・『入道右大臣集：尊経閣叢刊』侯爵前田家育徳財団、一九四三年。

・山根有三「土佐光吉とその関屋・御幸・浮舟図屏風」『国華』七四九、七五〇号、国華社、一九五四年。

・東京大学史料編纂所編『大日本史料』第一二編之一―四六、東京大学出版会、一九六八年―一九七七年。

同著、第十二編之四七―六二、東京大学史料編纂所、一九七七年―二〇二〇年。

・小松茂美『日本書流全史』上下、講談社、一九七〇年。

・小松茂美『古筆』講談社、一九七二年。

・小松茂美『日本書蹟大鑑』第一五巻、講談社、一九七八年。

・小松茂美『日本書蹟大鑑』第一六巻、講談社、一九七八年。

・小松茂美『日本書蹟大鑑』第一三巻、講談社、一九七九年。

・小松茂美『日本書蹟大鑑』第一四巻、講談社、一九七九年。

・小松茂美『日本書蹟大鑑』第一七巻、講談社、一九七九年。

・小松茂美『日本書蹟大鑑』第一八巻、講談社、一九七九年。

・日下幸男「中院通村年譜稿：少青年期」『國文學論叢』三一、龍谷大學國文學會、一九八六年。

・鈴木健一「後水尾歌壇の成立と展開」『國語と國文學』六三、東京大学国語国文学会、一九八六年。

・小松茂美『古筆学大成』全三〇巻、講談社、一九八九年―一九九三年。

・『源氏物語手鑑研究』和泉市久保惣記念美術館、一九九二年。

・小堀宗慶『小堀遠州の書状』東京堂出版、二〇〇二年。

・日下幸男「中院通村年譜稿：中年期（上）」『國文學論叢』四八、龍谷大學國文學會、二〇〇三年。

・日下幸男「中院通村年譜稿：元和二年」『龍谷大學論集』四六二、龍谷学会、二〇〇三年。

・久曽神昇編『伊達本古今和歌集　藤原定家筆』笠間書院、二〇〇五年。

・日下幸男「中院通村年譜稿：中年期元和三年～八年」『龍谷大學論集』四七一、龍谷学会、二〇〇八年。

・工藤寛正編『江戸時代全大名家事典』東京堂出版、二〇〇八年。

・高梨素子『後水尾院初期歌壇の歌人の研究』おうふう、二〇一〇年。

・笠嶋忠幸『日本美術史における「書」の造形史』笠間書院、二〇一三年。

・野鳥寿三郎編『公卿人名大事典　普及版』日外アソシエーツ、二〇一五年。

・日下幸男『後水尾院の研究』勉誠出版、二〇一七年。

・長坂成行『篠屋宗磵とその周縁―近世初頭・京洛の儒生』汲古書院、二〇一七年。